

会議録
令和7年度 第2回総合教育会議

- 1 日 時 令和7年12月18日（木曜日）
午後2時45分～午後4時8分
- 2 場 所 市立中央図書館2階 視聴覚ホール
- 3 出席者 市長 星野 光弘
教育長 山口 武士
委員 宮 陽一
委員 深井 美千代
委員 深野 はるみ
委員 杜多 堯慶
- 4 署名委員 委員 宮 陽一
委員 杜多 堯慶
- 5 説明職員 教育部長 下田 恭裕
学校統括監 武田 圭介
学校教育課長 鳥山 裕貴
学校教育課指導主事 矢場 友道
- 6 事務局職員 政策財務部長 磯谷 雅之
政策企画課長 平 輝軌
政策企画課副課長 常盤 欣男
政策企画課主査 新井 達也
- 7 傍聴者 0人
- 8 議 事 いのちの授業+（プラス）について

【星野市長】

それでは、本年度2回目の総合教育会議、2学期の会議を開催させていただきたいと思
います。教育委員の先生方には、定例教育委員会会議に引き続いての会議ということにな
りますが、ご参集賜りまして誠にありがとうございます。

まず議題に入ります前に、本日の会議録の署名委員の指名をさせていただきます。会議
録署名委員には宮委員、杜多委員を指名させていただきます。よろしく願いいたします。

本日の議題につきましては、いのちの授業+（プラス）でございます。会議の中でまず
は、いのちの授業がスタートした背景、また本市での全校的な取組、各校での特色ある取

組、そして今後の計画と目指す未来について、委員の皆様と共有をさせていただき、児童生徒の命を大切にする心を育む取組や、その環境作りを一層力強く進めていくための議論としたいと考えておりますので、何卒よろしくお願ひいたします。それでは、矢場指導主事よろしくお願ひいたします。

【学校教育課 矢場指導主事】

(いのちの授業+ (プラス) について説明)

【星野市長】

矢場先生ありがとうございました。これまでの取組を大変わかりやすく、他のデータも加えていただいて丁寧にご説明をいただきました。ありがとうございます。いつものようにこの後、委員の皆様からご意見、またご質問、または提案などを頂戴したいと考えております。

現在、いのちの授業については全校での取組として先生方のご努力で体系的に取組を行っていただき、ここ数年でボリュームもアップするとともに、外部からもご支援をいただいて充実をしてきたと私は捉えております。ここ数年ふるさと祭りや、地域のお祭り、その他様々なイベントで中学生の姿をよく見ることがあると感じております。そういう意味では先ほどの設問の中にもありました、「地域に何か貢献できることは」といった中でも、地域が率先して校長先生に依頼するなどの調整を経て、子どもたちが外へ出る、またその力によって貢献をしているものと捉えております。その中でも最も顕著だったのは水谷東地域ですが、水谷中学校の子どもたちが防災訓練に参加して、例えば歩けないお年寄りをリヤカーに乗せて水谷東第1町会から水谷中学校まで運んだりするなどの光景が見られました。今年は残念ながら雨でできませんでしたが、参集訓練の中に子どもたちが率先して参加をしていただいております。私が行ったときには、松葉杖で来た子がいました。そこまで徹底してやるのかと思ったら本当に骨折していたということで、それでも出てきてくれたというエピソードでございます。

それから、お手元の資料の「4 特色ある各校の取組」の所ですが、諏訪小学校の皆さんとセルビアの赤いユニフォームを着た外国の方がたくさん写っていると思います。今年の私どもの大きな事業として、デフリンピックに参加するセルビアのデフハンドボールチームの選手、監督や関係者の方々にお越しいただきました。そして、大崎電気工業さんがハンドボールのトップリーグのチームでございますので、お願ひをしたところ、壮行試合をしていただけると二つ返事でOKをいただき、その試合を本市の体育館で行いました。このときは駐日セルビア大使であるアレクサンドラ・コヴァチュ大使もおいでをいただいて花を添えていただきました。

最後には子ども達がハイタッチで別れるシーンを目の当たりにしましたが、実はその前は、試合がスタートすると子どもたちは大崎電気工業さんを応援するんです。これは感情としてはもう無理もないことで、試合も大崎電気工業さん優位に進むので大崎電気工業さんを応援する子どもたちがほとんどだったのですが、後半から点差が開いてくると子どもたちがセルビア頑張れ！とだんだん変わってくるんですね。ハンデがありながらもスポーツに親しむ、また遠いセルビアから来た選手に対して子どもたちが大きな声と手を振って

応援をして、こうした光景が自然に生まれ、ハイタッチをして子どもたちと選手が別れるシーンを、ここで取り上げていただきましたので少し解説をつけさせていただきました。

長い期間の中で様々な要素を取り入れながら変化をしまいいましたいのちの授業であり、現在はいのちの授業+（プラス）ということでございます。

まずご質問や、何でも構いませんのでぜひ矢場先生にご質問いただきましたら幸いです。ですが、いかがでしょうか。

それではまず私からご質問をさせていただきます。

どうしてもデータに目がいきます。最初の方のページに埼玉県学力・学習状況調査や全国学力・学習状況調査の調査報告をいただいておりますが、県も伸びているので、うちの伸びが追いつかない、私はこうした授業をいかに頑張っても急に顕著に結果が現れるということは難しいものと思っておりますが、やはり努力の結果が少しずつあらわれてきているものと思っております。

一方で、この間、コロナ禍でありますとか、コミュニケーションを取れない時期もあったわけですが、そうしたものが大きく子どもたちに影響があったものと思っております。現場にいらっしゃる先生方としてはコロナ禍からアフターコロナにかけての成果、いのちの授業とコロナ禍との関係などはどのように感じているかについてお伺いしたいと思います。

【学校教育課 矢場指導主事】

まず本市が捉えている自尊感情の意味ですが、自分には価値があり、優れた存在であると認める感情であると捉えており、自己肯定感とは少しニュアンスが変わっております。自己肯定感はある自分もできない自分もあるのまの自分を受け入れる感情であり、自尊感情は先ほど申し上げたように、自分は価値があり、優れた存在であると認める感情であると捉えております。

その中で他者との関わりが大きく自尊感情には影響するものと捉えています。コロナ禍というのは、他者との接触ができなかった時期となっております。過去のデータの中では自尊感情がとても低かったところがあります。しかしながら、それがコロナ禍を終えて、今非常に高くなってきております。確実にアフターコロナの状況の中では、いのちの授業を踏まえながらしっかりと回復しているということです。

【星野市長】

ありがとうございます。それから先ほどエピソードで触れた地域との関わり合いについてですが、様々なお祭りで子どもたち、特に中学生の姿を運営側で協力をいただいている形で多く見るようになりましたが、これは、地域からのご要望または学校としても地域に子どもたちを出すこと、校長会の方からも外へというようなことがあるのかと思うのですが、現状を教えてください。

【山口教育長】

市長がおっしゃるように、受け入れ側のオーダーと、出す側の意欲、両方が必要だと思います。また、両方とも年々広がっていることを私も実感しています。様々なイベントに呼ばれて参加すると、去年までは中学生の姿がなかったイベントにも中学生を呼んでいた

だけるところが確実に増えておりますので、理解と努力が進んでいると感じます。校長先生方も、特に中学校は積極的に生徒を出すということで協力していただいておりますし、実際にそのイベントに校長先生が足を運んでいただいて、中学生の様子を見ていただいていることを私も確認しています。

近年では小学校の方にも同様のことが広がってきていて、例えば先日の勝瀬小学校区の地区体育祭では、中学生と小学生両方のボランティアを募集して、合わせて約20名がボランティアとして地域の方々の前で紹介されていました。

そういった取組が広がっておりますので、その成果については後々ついてくるものかと思っております。

【学校教育課 矢場指導主事】

地域への参画に関連する内容ですが昨日、富士見台中学校で道徳の授業研究会を行い、その後の教職員での協議会の中で自尊感情を高めるためにはどうすればいいかという議論と、地域への参画を行うためにはどうすればいいかという議論が熱く行われました。自尊感情を高めるための議論としては、周りからも富士見台中学校の生徒は挨拶ができると思われているところ、また子どもたち自身も挨拶ができる自信を持っている、この強みを誇りとして捉えて、それを地域に発信していくことが大事だという話が出ておりました。

自分たちが誇りを持っていることを積極的に地域に発信していく、地域に向かってたくさん挨拶をしていくことは、地域への参画に繋がるのではないかという話し合いが行われたとともに、地域とより密接な関係を築くために、地域の方々に富士見台中学校の生徒のことをどう思っているのか聞いてみるという考えも良いのではという話し合いも行われていて、先生方がどうやって地域に理解をしてもらおうか、どうやって地域と連携をしていくか、必死に考えている様子が伝わってきました。

【星野市長】

ありがとうございます。その他、皆さんいかがでしょうか。

【深野委員】

教えていただきたいのですが、アサーショントレーニングを関沢小学校で実践しているとありましたが、自己主張をするトレーニングがアサーショントレーニングということで、自尊心や自尊感情を高めるということとはまた違うと先ほどご説明いただきました。その辺りについても一度教えてください。

【学校教育課 矢場指導主事】

このアサーショントレーニングというものですが、やはり自尊感情を高めるためには、友達、他者との円滑なコミュニケーションは欠かせないというふうに捉えています。円滑なコミュニケーションを図るためには、相手の要望、意見をただ受け入れるばかりではなく、自分の考えを相手にしっかりと伝えることも大事になります。

そこで、アサーショントレーニングというものが必要になります。相手の考えをただ受け入れるだけでなく、相手を大切にしながら自分の意見をしっかりと伝える技術を授業

の中でどの学級も取り組んでいたというところです。

【深野委員】

ありがとうございます。

私も苦手な分野なのですが、アサーショントレーニング、どのようにしていったら良いでしょうか。

【学校教育課 鳥山課長】

よく取り上げられる例がジャイアンとのび太くんとしずかちゃんです。

ジャイアンは自分の思い通りにさせたいので、力で自分の意見を通す。のび太くんはどうにかその場から逃げたいので、自分がそうしなくてもそれを受け入れてそれに従ってしまう、これは両方ともコミュニケーションとしては良いものではありません。

一方でしずかちゃんの例はどうなるかという、結構自分が思っている通りに主張して、相手を傷つけないやり方で進めていく。そういうコミュニケーションの取り方でどういうものが一番良いのかという考え方をさせます。これは一つの例ですが、色々なプログラムがあります。

そういった形で、あとは学年であったりとか、その状況に合わせてプログラムを選んだりというような形です。

【星野市長】

わかりやすい説明ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

【宮委員】

いのちの授業は自尊感情を高めるという大きな目標のために、それぞれ教科領域等で実施されているということは非常に素晴らしいことだと思います。

資料によると平成30年度からいのちの授業が18校でスタートしたということですが、実はちょっと自慢ではありませんが、10年程前に、私と、養護教諭と、当時助産師だった中先生と3人で、生命の誕生、成育、大切さというような形で理科の中で始めました。当時の社会の背景として、ゲームなどで1回死んでしまったのに、それが平気で生まれ変わるというようなことから、自殺とかもまた生まれ変われるというような考えが世情としてありました。

それと、いわゆる性教育をやらなければならないといったことが社会的に問題になっていた頃で、私も理科の教師として性教育、生命の誕生はどこからだということを子どもたちに教えるには、単純に言葉だけではわからないだろうと考えました。

例えば、本当に精子と卵子によって初めて命ができることや、お母さんの体の中に心臓が二つあり、それが生まれて育つことに大切さがある、重要性があるというようなことを教えるためにはどういう形が良いのかを考え、その時に性教育も含めてということで、中先生とも話をして当時ビデオも使いながら、お母さんのお腹の中に赤ちゃんがいるというような話をさせていただきました。

その後、3年程経ってそれが保護者にも伝わり、お母さん方が自分の子ども、まだ首も

据わってない子どもや1歳の子とかを一緒に連れてきて生徒たちに抱っこをさせる。そうすると生徒たちの変化はすごくて、話だけではなく実際に赤ちゃんを抱っこしてみる体験をするとやはり怖がるのです。初めてお父さんが自分の子どもを抱いたときに怖いと思うのと同じように、生徒たちが生きている者を抱っこすることが非常に怖い、大切だということを真剣に受け止めていて、今でもその子どもたちの目というのがすごく印象に残っています。あの当時ですからやんちゃな子もいましたが、それでも本当に真剣に聞いていたことが私の印象に残っています。

そういうことを基にしてこのいのちの授業が全校に広がっていき、さらに色々な形となって自尊感情を高めるために広がっていることは素晴らしいことだと思います。

その中で逆にここに一つ、生命の誕生、あるいは生育の大切さという項目を1個の分野として入れてもらおうと、本当に命だけに囚われてしまうのかもしれませんが、それが一番重要なところではないかと思います。

いのちの授業の中身を見ても、理科において人の誕生とか生き物の体の作りというような形がある中で、生命の誕生から命を大切にするという目標だけで一つ授業がしっかりと成立して、子どもたちに捉えてもらいたいので、ぜひその辺をお願いしたいと思います。最近本当に自殺、または衝動的に人を刺してしまうといった形で逆に言うと、命というものをすごくおろそかに感じているようなところがあるので、ぜひそういったことも重点的にやっていただきたいと思います。

以上が私からの要望です。

【星野市長】

ありがとうございます。矢場先生、いかがでしょうか。

【学校教育課 矢場指導主事】

ありがとうございます。宮委員のおっしゃるように、やはりいのちの授業が核になっている取組ですので、いのちの授業、命の大切さというところが薄くならないように、引き続きこれからも大切にできるように取組をさらに充実させていきたいと思います。

【星野市長】

はいありがとうございました。杜多先生どうぞ。

【杜多委員】

先ほどの富士見台中学校の生徒をどう思うかというふうな形での質問について、私が町内会だとすると、どう思うかと聞かれたときにどう答えたら良いかと思ってしまうのですが、例えばもう少し具体的に、挨拶の面であるとか、そういうような形で褒められるべきところを相手に伝えるという形も良いのではと思いました。

また、自分には良いところが、という質問に関しても、例えば家庭の中で祖父や祖母のことをよく世話しているという形もあるかもしれませんし、友達のことを一生懸命助けたという形もあるかもしれませんし、どういう答え方になるのかなと思いました。もう少し具体性と言いますか、何か工夫できないものかと思いました。

ボランティアの募集の関係もそうですが、例えば地域のお祭りとかに中学生が参画する場合には企画の方にも入っているのでしょうか。自分たちが主体性をもって参画するところまでいかないと褒めるところまでいかない、褒められないと自尊心のところに続かないというパターンだと思いますが、そういう意味では少し企画部分に入ることができるの良いのではと思いました。全部が自分たちでできる話ではないので、地域の人たちとの連携が必要にはなりますが、ただそうなってくると、地域全体に対しての発信はどんな形なのか、地域の役員の方だけはわかっているけれども、一般の人たちは何か子どもたちが増えたかな、とか、見方としてそれは役員の方が中学生の子たちがやってくれるということを言ってくれないとそこに注目されないと思います。ですから、繋がりがもう少し欲しいのと、プログラム全体の繋がりについて、もう少し何か工夫が必要なのかもしれないと思いました。

それからもう一つ、最近いじめの重大事態に関しても、文部科学省とこども家庭庁でしょうか、マニュアルを出しましたが、まだ現場には伝わっていないのかもしれませんが、やはりある程度マニュアルが必要でマニュアル化される中でいじめの発見が早くなり、先生方の仕事の量を減らすあるいは整理できるというところにも繋がるかと思ったところです。やはりいじめの重大事態というものが右肩上がりの状況になっていますので、そこら辺の取組をどういうふうにしていくのかと思いました。

そして、最後にやはりネットの関係ですね。ネットのモラルに関しても一応特別活動の中で入っていますが、独自に分離してはどうでしょうか。もう少し重要性が増しているのではないのでしょうか。危機感がもう少し強いのではないかと思います。偽情報も含めて、AIによる画像生成なんていうのは我々よりも遥かに上手な状態になってきて、それらに対してのリテラシーがどういう状況になっていくのか、不安に思う部分があります。

学校ではそれをどう使うかというところにまだ集中しているところであって、それを第三者的に離れて見たときにどうあるべきかというところからある程度、教科書が紙かタブレットかといった議論にもなっているのかもしれないと思いました。

話を戻しまして、やはりネットモラルの部分に関しては強い形でやっていかないと、いのちの授業、自尊感情の関係は部分的に伸びないところできてしまうかもしれないと思ったところです。

もう一つ、子どもたちが自尊感情というものの中で、自分には良いところが、というのは、自分の良いところということと、自分ができるというところ、その両方だと思います。自分にできることが、何があるかと考えると、地域でのことなどもどこかであるのかと思います。学校ですから色々とやることは難しいのですが、お祭りとかそういう中で発揮できると良いのではとも思いました。

【星野市長】

ありがとうございました。

いくつかご示唆いただきましたので、最初に富士見台中学校の生徒ということを一例でいただきました。地域との関わり合いの中で、確かに、目に触れるようになってきたが実際にこれから中学生が地域に出てきて、そこで地域との関わりの中で、その先ほど矢場先生から富士見台中学校の道徳の授業の後の研究会のエピソードをご紹介いただきましたが、

こうした地域との関わりをどう作っていったら良いのかとかいうようなところが1点、または主体的な参加が、中学生や子どもたちが企画をしたりする参画ができるような場があるのかどうか、まずはこの二つのところで感想とお答えをいただけますか。

【学校教育課 矢場指導主事】

富士見台中学校の生徒のことにつきましては、地域の方からどんな評価をいただきたいかということについては、やはり先ほどもお話ありましたが、子どもたちもできること、できているということを実感したいという思いが強くなりますので、地域の方からどう見られているのか、どんなことがすごいのか、立派なのかということをお評価していただきたいというところがあると思います。

例えば、元気な挨拶ができるとか、交通マナーがしっかり守れるとか、地域にたくさん顔を出してくれるとか、そういう声がいただければと考えております。しかしながら、課題というところもしっかり明らかにして、実態を把握した上でより良くしていきたいという思いが強く先生方の中にあると感じました。まずは率直な評価を地域からいただいた上で、子どもたちをより良くしていくという考え方というふうに思っております。

【山口教育長】

中学生の行事への参画の内容ですが、第1段階としては、元々既存のイベント等に声をかけていただいてお手伝いをする、いわゆるボランティアから入ります。

お願いする方も中学生がどこまでできるのだろう、何をお願いしていいのだろうということを手探りの状態から始まります。それが定着してくると、例で言いますと、一つは水谷公民館祭りですが、その中ではボランティアから始めたのですが、近年は中学生に一つのブースを任せて、内容も中学生が企画して、小さい子どもたちが楽しめるような企画を中学生に主体的にやってもらっています。

それから、勝瀬 de 縁日（かつせでえんにち）も伝統的な行事になってきましたが、勝瀬中学校に声がかかって、最初科学部の子が、自分たちでどういうものを企画したら、小さい子どもが楽しめるだろうということを主体的に企画準備しておりました。もちろん顧問の先生の指導もあると思いますが、そういった形で発展してきております。

今後さらに望むところは、イベント自体についてもこういうイベントをやったら地域を盛り上げられるのではないかとといったアイデア出しですが、今高校生の方ではそういったことを、政策企画課中心にフジミライテラスなどでやっておりますが、中学生も中学生ができるようなことで、発展をしていければ、私達が目指している自尊感情の醸成、それから地域の中での所属感を育てられるのではないかとこのように思っておりますので、少しずつ芽は出てきているというふうにご理解いただければと思います。

【学校教育課 鳥山課長】

先ほど中学校の例で勝瀬中学校を挙げていただきましたが、小学校も総合的な学習の時間の中で地域に出でいくことが広く取り組まれています。

水谷小学校の例でいきますと、地域のパン屋さん、こういうパンを作ったらどうだろうということを提案して実際に売ってもらった例がありました。また、針ヶ谷小学校では

地域のお祭りに、自分たちでお店を出したいというところから始まり、それを広げていった例もありました。

どうしても継続して実施していくことが難しい部分ではありますが、それを体験した子どもたちは自分たちの希望もお願いすることでそれが叶うということを実感し、そのサイクルが積み重なっていけば中学校に上がったときに、それこそボランティアのときなどに、もっとこういうことができるのではという自己有用感という部分にも繋がり、それが最終的には自分って結構できるぞ、という自尊心に繋がっていくものということを感じているところです。

【星野市長】

ありがとうございました。あとネットモラルについても、知見がありましたらご披露いただけますでしょうか。

【学校教育課 矢場指導主事】

ネットモラルにつきましては校長会でお話をさせていただき、また生徒指導訪問でもいじめを防ぐための取組を常々話をしております。子どもたちがいじめで悲しい思いをすることがないように、学校の方は全力を尽くしているところです。ネットいじめについては全ての学校ではないですが、生徒児童が主体のルール作りを行っております。例えば本郷中学校で言えば、子どもたちの委員会活動の中にネットトラブルゼロ委員会という委員会があり、生徒主体でルール作りを行う取組を行っております。それを他校に周知を図るなどして他の学校にもその取組が浸透しており、教員が禁止するだけでなく、子どもたちが自らいけないと気づき、仲間に発信する取組がこれからは必要と感じております。

【星野市長】

ありがとうございます。その他、ご意見等はいかがでしょう。

【杜多委員】

先ほどの水谷小学校のパン屋さんの件については、どういったプロセスで結果として実現しているのでしょうか。最初の核のところから、どのような流れで結果として実現されたものなのでしょうか。

【学校教育課 鳥山課長】

水谷小学校の総合的な学習の時間は縦割りのプロジェクト型の取組という、特殊な形をとっております。自分たちはこういう取組をしてみたいという思いを持った子たちが4年生から6年生までの縦割りで集まります。

その中で、水谷地域は地域の関わりが深いところでもありますので、たまたま繋がりがあって面倒を見ていただける人がいまして、小麦粉のところから始まり、こういうところからなんだ、次はこうやってみたい、といったように、一つのところからどんどん希望が広がっていき、調整する先生たちは大変な部分もあるとは思いますが、それがすごくうまくいっていると、学校研究で感じたところです。

【星野市長】

ありがとうございました。深井先生いかがですか。

【深井委員】

いのちの授業についてはとても良い取組だと思いますが、親に浸透していないのではと思っていました。いのちの授業の話をする、まだまだ知らない方が多いので、親の意識から少し入っていただけらと思いました。

あと家庭で少し課題があるお子さんとかは、親御さんに何かしらの課題を抱えていらっしゃることもあるのかなと思いますので、親の方にもいのちの授業などを聞いてもらい、生まれたときの感動などを思い出してもらって、子どもの関わり方みたいなものを改めて築き上げていってもらえたら、根本からうまくいくのではとったりもします。ですが、ご両親もお仕事をされていて忙しいので、集まる機会も少なく、集まりもあまりよくないのかもしれませんが、以前諏訪小学校で学年レクというものがあり、みんなで子どもと一緒に遊ぶ会があり、非常に多くの親が来てくれていました。今は無くなってしまいましたが、そういった機会を活用して大事な先生のお話を親子で聞いてもらえたら良いのではないのでしょうか。親と子どもの関わり方とか関係性を見直してもらえたら、もう少し取組としても進んだものになっていくのではないのでしょうか。

人を集めることはとても難しいことですが、子どもたちだけではなく親の意識も変えていけたらと思うので、そういった取組ができれば良いと思うのですが、その辺りはいかがでしょうか。

【学校教育課 矢場指導主事】

いのちの授業+（プラス）プロジェクトチームの中でも、自尊感情の向上は学校だけでは実現することはできないといった話がありました。やはり家庭や地域を巻き込んでいかなければならないというところで、いのちの授業も保護者が参加できるような仕組みをとっている学校が多くございます。

しかしながら、なかなかお仕事の関係で参加できない方もいらっしゃいますので、取組を保健だよりという形で全ての学校で発行しております。しかしながらそれだけでは伝わらないところもございますので、家庭との連携については、プロジェクトチームを通してどのように今後、保護者の方に関心を持ってもらえるかというところを検討していきたいと思っております。

【深井委員】

お手紙についてですが、子どもたちが全て親にお手紙を渡すとは限らないと思います。机の中に残したままということもあるかと思っておりますので、何か他の形でも発信することができたらと思います。ぜひとも、よろしく願います。

【学校教育課 矢場指導主事】

この取組の目指す先としては、誰が聞いてもいのちの授業+（プラス）という言葉を知っていたら、知っているという状況だと思います。子どもや教職員がそれを理解するのは当然のことながら、今後は子どもたちもいのちの授業+（プラス）の取組を理解していて、それが家庭でいのちの授業+（プラス）っていう授業をやっているという話を聞けば、それはどんな取組なの、といった形で話題が広がっていくとも思いますので、こちらの仕事としていのちの授業+（プラス）の趣旨をしっかりと先生方にまずは理解していただくこと、そこからスタートしていきたいと思っています。

【武田学校統括監】

色々な話が広がっていておりますが、それが実はいのちの授業+（プラス）をやっている理由だと思っております。

宮委員が最初にお話いただいた通り、いのちの授業は助産師と連携して、自分の生まれた奇跡について考えよう、自分はかけがえのない存在で、同じように他者もかけがえのない存在だという考え方を大切にしてきました。その授業によって子どもたちは大きく変わりますが、1年、2年と経つと、薄れていってしまいます。なので単発ではなく、様々なことを自分の命と繋げて考えていき、最終的には自分がどう生きていくのかといった、生き方を考える授業がいのちの授業+（プラス）だと考えています。

それは国語でも算数でも地域でも家庭でも全部きっかけがある、それを繋げていこうとしているのがこのプロジェクトでございます。

自分を見つめるにあたって、あなたはどのような人間ですかと言われても、おそらくすぐには答えられないでしょう。だから、自分を見つめるための多様な視点を子どもたちに持たせて、自分の見つけ方を考えさせていく。

例えば定期健康診断で自分が成長したことを知り、どうしてこんなに大きくなったのだろう、どうしてこんなこともできるようになったのだろう、と考え、家庭の力、先生の力、また友達の力がそこにはあったということ、定期健康診断をきっかけに自分の見つけ方を考えていく。交通安全教室では自分を守るために地域の人たちがいるということから、地域から守ってもらっている自分を自覚させ、救命教育プッシュ授業を通して心肺蘇生によって誰かを守る自分があるなど、色々な方向から自分を見られるようにして、そして他者にもそれを返していくことを学び、自分を見つめるために、他者の目線や立場を使っていくなど、そういったことを繋げていくためにいのちの授業+（プラス）をやっていると思っています。

杜多委員からも、地域の話が出ましたが、地域に対しても「こういう取組をしているので、中学生や小学生がボランティアに参加した際には良い所を見つけて言葉として返してあげると、その子が自分の価値に気づくきっかけになるので、そういう目線で言葉をかけてください。」というようなことを、今後、来年度から始まるコミュニティ・スクールなどを通して、地域にも発信してまいります。

また、深井委員が言ってくださったように、子どもたちの周りの大人にも理解してもらって子どもたちをどうやって見ていくかということをやんと理解をして、学校、地域、保護者、それぞれで子どもたちを育てていくきっかけに、このいのちの授業+（プラス）

がなくなっていくという、未来像と可能性を感じております。なので、広い視野を持って取り組んでいければと考えております。

【星野市長】

ありがとうございました。そろそろお時間も経ってまいりましたが、他にございますでしょうか。

【杜多委員】

私は今お話を聞いていて、まさに教育委員会にお誘いいただいて本当にありがたいことだと思っております。まさにこの総合教育会議そのものが、世間では少子化など、マイナスなことばかりが聞こえてくる中で、逆に少子化だからこそ何をしたら良いのかという、そういう形での発想は、こういう会議でなければできない話だと思いました。

少子化だからこそコミュニティをという話で、もう一つ、資料の「2 目的と取組の概要」のいのちの授業を核とした教科・領域等とのイメージ、の図でそれぞれ文章が書いてある周りに、もう一つ、輪っかがあり、この輪っかとは一体何だろうと最初は思っておりましたが、この輪はここから先へ繋がるもの、この外側にある輪の様子を見ているのだろうと思いました。だとすれば、我々としてはやはり外側の輪にどうやってアプローチしていったら良いのかということの研究、あるいは提案してもらおうと、すごくやりがいのある委員会になるものというふうに期待をいたしました。

【星野市長】

ありがとうございました。

私の方から最後に一つ、資料の「5 今後の計画」の部分についてですが、今後の計画で、実践事例の共有、授業研究会の開催、各種調査結果の分析や外部人材の確保などを挙げておられますので、我々市長部局としても教育委員会を支援していく、ご評価をいただいているこのいのちの授業+（プラス）をよりよく発展させていきたいと思っておりますので、具体的にこういったものが足りないとか、事業を進める上の問題や課題などを最後にご披露いただき、また、先生方や教育委員会の側からの要望というようなことがありましたら、ぜひお話いただきたいと思っております。

【学校教育課 矢場指導主事】

まず、外部人材については今でも十分な取組が行われていると思っております。新たな取組を始めるというものではなく、授業を充実させるということが本質でありますので、さらに質を高める新たな知識をといるところと言えば、より質の高い講演、お話をいただけたらと思っております。子どもたちをより高めていくために、そのための外部人材に関わる予算も将来的には必要になってくるものと思っております。

【星野市長】

ありがとうございます。

やはり有益になる体験をお持ちの方が必要であると思っております。委員の皆様におかれまし

でも、それぞれのネットワークをお持ちですのでご推薦をいただくなど、大いに歓迎でございます。よろしくお願い申し上げます。

また、私は何度か矢場先生とこの会議に向けて調整をしておりますが、最後のところについては先日も伺ったところでもありますので、やはり充実した教育が行われるための予算の確保ということは、これは私の役目でもありますのでしっかりと承りました。

それでは最後に山口教育長よろしくお願い致します。

【山口教育長】

いのちの授業については、宮委員からもお話がありましたように東中学校からスタートして、実践を積み重ね、そして星野市長就任以来、本市全体の取組として18校で始めて8年目となりました。実践を積み重ねてきた中で、本日矢場指導主事が説明したような形に整えてまいりました。

大事なことは、目標である子どもたちの自尊感情を育てることですので、それが一人一人にまで浸透していくように、そのためには本日ここでお話が出たように、教職員がまずこのことを理解し、日々の実践の中で自尊感情を育てるという姿勢を示すことで、それを支えていただける地域の方や保護者の方にも理解が広がれば、より良いものになっていくということを改めてここで確認をさせていただきましたので、教育委員会が今後進めること、学校が努力すること、そして市長部局に支えていただくことを併せて、今後も進化させ続けるものと考えております。

それからもう一つ、核はあくまでも宮委員が始めた命を大切にする、一人一人が大切な命だということですので、たくさんのことを広げすぎてそこがぼやけてはいけないと私は思っています。ただ、結局は全部そこに繋がっているということを整理して今日説明させていただきましたので、そのことはこの先も忘れずに、何を大切にするのかということをしっかり捉えて進めていきたいと思っております。

【星野市長】

はい、ありがとうございました。

矢場先生はじめ学校教育課長ありがとうございました。

総合教育会議は年3回の開催でございますが、こういった形で皆さんと情報共有並びにご意見を賜ることができること、ありがたく思います。本日の内容につきましては山口教育長がおっしゃった通りこれからも、継続をし、さらに進化をさせていく事業でありますので、私としてもしっかり努めてまいりたいと思っております。

それでは本日の会議を閉じたいと思っております。貴重なご意見をいただきまして誠にありがとうございました。